

# 『日本書紀』の「臣の子の八重の紐解く…」という歌

佐佐木 隆

## 1

天智天皇が崩御し、八日後に殯もがりの儀式が行われた。その時の「童謡」として、『日本書紀』に三首の歌謡が載せられている。本稿では、そのうちの第二首をとりあげ、歌の構成と構文について考える。同歌に対する現在の一般的な理解は、上代語の表現のありかたから見て妥当なものではない、と判断されるからである。

問題の第二首は、

1 臣おみの子の 八重やへの紐解ひもとく 一重ひとへだに いまだ解かねば 御子みこの紐解く  
〔紀一二七〕

という歌だが、参考までに第一首と第三首もあげておく。

『日本書紀』の「臣の子の八重の紐解く…」という歌（佐佐木）

『日本書紀』の「臣の子の八重の紐解く…」という歌（佐佐木）

六八

- 2 み吉野えのの 吉野よしのの 鮎あゆ 鮎あゆこそは 島辺しまへも良よき え苦くるしゑ 水葱みずぎの下もと 芹せりの下もと 吾われは苦くるしゑ  
〔紀一二六〕
- 3 赤駒あかこまの い行き憚はばかる 真葛原まゝはら 何なにの伝言つてこと 直ただにし良よけむ  
〔紀一二八〕

三首とも童謡だから、事態や状況をそのまま直接に詠み込んだ歌ではない。それぞれに寓意があって、歌の内容はどのようなことを象徴するものなのか、歌句は具体的に何をさすものなのか、ということが必ずしも明確ではない。新編古典全集では、第二首の1について、

近江の廷臣が解き得ずに、大海人皇子が難問を解いたと、壬申の乱の收拾を予言した諷刺歌（童謡）。独立歌謡とし、男女の紐解きと解する説がある。歌謡三六と同じく、皇子のために作られた童謡。

と解説し、歌を「臣の子が八重に結ばれた紐を解くのだが、その一重さえもまだ解かないのに、御子が紐を解くことよ」と口訳している。また、最新の『日本書紀「歌」全注釈』（大久間喜一郎編）では、歌の主体は天皇に仕える女官であり、当時の大臣らが近江方ではなく大海人皇子側についたことを「御子の紐解く」と言ったのだと解釈している。そして、歌を「（私は）臣の子の八重に結ばれた紐を解く。その一重さえもまだ解いていないのに、御子の紐を解くことだ」と口訳している。

前者の「…紐を解くのだが、」という口訳は、第二句と第三句との関係をどのように把握したうえでのものかが明確ではないが、後者の「…を解く。」という口訳は、歌の構成を二句切れと見たうえでのものである。二句切れとする解釈は、山路平四郎『記紀歌謡評釈』の「廷臣どもが、幾重にも結んだ貞操堅固な紐を解く。一重だけでもまだ解か

ないのに、皇子様が、いち早くその紐をお解きになって我が者にされる」という口訳にも反映しているし、土橋寛『古代歌謡全注釈』の「臣の者たち（近江朝の宮臣たち）が八重の紐を解く。その一重でさえまだ解かないのに、皇子（大海人皇子）が紐を解いてしまったよ」という口訳にも反映している。大久保正『日本書紀歌謡』でも、二句切れと解釈している。結局、1の歌の構成は、一般に、

臣の子の八重の紐解く。一重だに未だ解かねば、御子の紐解く。

というようなものだと考えられているわけである。

しかし、それは、本稿の冒頭にも述べたように、上代語の構文から見て不適切な解釈であり、次のような構成のものだと理解すべき可能性が大きい。

臣の子の、八重の紐解く一重だに未だ解かねば、御子の紐解く。

つまり、1の歌は二句切れではなく、第二句・第三句の「八重の紐解く一重だに」が、「八重の紐を解こうとするその一重さえも」という意味的なまとまりをなす表現であり、したがって、これは句切れのない歌だと理解すべきものである。以下に、そのように理解すべき根拠について、上代語の構文や上代の歌の表現を見ながら具体的に述べる。

## 2

まず確認しなければならないのは、第一句の「臣の子の」は構文面でどのような機能をもつものなのか、という点である。従来の解釈には、この句を主語だとするものと連体修飾成分だとするものとの、二種の見解がある。前者の見解を採用する研究者が多いようである。

しかし、上代語の構文から見て、「臣の子の」は主語だと解釈し、それを、第二句の末尾にある「解く。」という動詞が承けていると解釈することは、不適切であり無理である。主語の「…の」にしろ「…が」にしろ、これらの助詞はもともと連体格助詞なのであり、「奈良の山」「我が国」のように体言と体言とを結び付けるのが本来の機能である。だから、主語の「…の」「…が」を、動詞あるいは助詞と助動詞の結合体が承けているように見える表現であっても、その動詞・助動詞のあとには、「人の言ふ時」「吾が行く道」のように、体言あるいはそれに準じる語がくるのを原則とする。実際に、3の歌謡でも、「の」を伴う「赤駒の」という主語を承けるのは「い行き憚る真葛原」であり、「い行き憚る」という複合動詞の連体形が「真葛原」という体言を伴っている【現代語でも、体言を伴った「私の読む本」は可能だが「私の読む。」は不可能である。上代語と中古語では、「が」の機能もまったく同じ状況にあった】。

『日本書紀』の歌謡に見える、主語の「…の」「…が」を動詞あるいは助詞と助動詞の結合体が承ける類例を、参考までにしてみる。ただし、

I 「吾が立たせば」〔紀七五〕や「汝が言へせこそ」〔六八三〕のように、主語の「…の」「…が」を已然形が承ける

もの。

Ⅱ 「何とかも愛し妹がまた咲き出来ぬ」〔一一四〕のように、主語の「…の」「…が」が係り結びの呼応のなかに包含されるもの。

の二種に属する例は、今の問題とは別に扱う必要があるので、举例から除外する【次にあげる諸例には、「其が尽くるまで」〔七八〕の例と「吾が思はなく」〔一一七〕の例とが含まれている。周知のとおり、「まで」もク語法も文法的には体言の資格をもつ】。

「弟織女の項がせる玉の御統の」〔二二〕、「夷つ女のい渡らす迫門」〔三三〕、「吾が率寝し妹は」〔五五〕、「吾が待つや鳴は」〔七七〕、「大物主の醸みし御酒」〔一一五〕、「出雲建が佩ける太刀」〔二〇〇〕、「少御神の……奉り来し御酒そ」〔三三二〕、「吾が行く道に」〔三三五〕、「貴人の立つる言立て」〔四六六〕、「磐之媛がおほろかに聞こさぬ末桑の木」〔五八六〕、「山背女の木鍬持ち打ちし大根」〔五七・五八〕、「雌鳥が織る金機」〔五九九〕、「吾が夫子が来べき夕なり」〔六六五〕、「吾が愛づる子ら」〔六七七〕、「下泣きに吾が泣く妻、片泣きに吾が泣く妻」〔六九九〕、「我が大君の遊ばしし猪の怒声畏み、吾が逃げ縁りし在峰の上の」〔七六六〕、「其が尽くるまでに」〔七八八〕、「吾が欲る玉の」〔九二二〕、「吾が大君の帯ばせる細紋の御帯の」〔九七七〕、「吾が大君の隠ります天の八十蔭」〔一一〇二二〕、「吾が飼ふ駒は」〔二一五〕、「吾が思はなく」〔一一七〕。

二十数例に及ぶこれらの表現には、主語の「…の」「…が」を終止形が承けたものが一例もない。調査を『古事

記』『萬葉集』にまで拡大しても、右の類例が増加するだけであり、結果はまったく同じである。主語の「…の」「…が」を終止形が承けているように見える事例は、原文の訓じかたやそれに対する解釈のしかたに問題が含まれる場合を除いてはまずない、と考えてよい。この事実は、これまでたびたび確認されていることである。

こうした点から見て、1の歌の主語である「臣の子の」を、第二句の「解く。」が述語として承けるという解釈は、どうしても成り立たない。そこで、「臣の子の」は主語ではなく連体修飾成分であり、「子」に下接する「の」は所有格のそれだとする解釈が出てくる。「臣の子の八重の紐」が意味的なまとまりをなす名詞句になっていると見るわけだが、その解釈によれば、「解く。」の主語にあたるものが提示されていない表現だということになる。その難点を除去するためには、これは、「臣の子が」臣の子の八重の紐解く。」という意味の、主語を省略した表現だと解釈せざるをえなくなる。

この解釈をとるある研究者は、次のような類例があると指摘する。

- 4 みつみつし 来目の子らが 垣本に 植ゑし山椒 はじかみ 口疼く… 〔紀一四〕
- 5 我が主の みし 御靈賜ひて 春さらば 奈良の都に 召上げたまはね 〔万五・八八二〕
- 6 大君の 八重の組垣 懸かめども 汝をあましじみ 懸かぬ組垣 〔紀九〇〕

右の三首は、他動詞が構成する「植ゑし」「賜ひて」「懸かめども」が述語になっている表現である。それらの述語を承ける主語は、意味的に「来目の子ら」「我が主」「大君」であるはずだが、ともに主語は省略されており、「来目の子らが」「我が主の」「大君の」に用いられている「が」「の」は連体格の助詞だといっているのである。

しかし、このような類例は、1の歌の「解く」を文末に位置する終止形だと解すること、「臣の子の」を連体修飾成分だと解することの二点に整合する表現の例として、あえて探し出したものである。しかも、類例では、「来目の子らが」「我が主の」「大君の」などの句を用いることによって、主語が何であるかが自然にわかるかたちになっている。ことさらに歌のなかに主語を提示すれば、表現のくどい、不自然で特異な文脈をもつ歌になってしまうから、当然のこととしてそれを避けた、ということだけのことである。

右の類例では、それぞれの歌を、誰がどのような立場で詠んだものか、ということが明確である。しかし、問題の1の歌は、天智天皇の殯もがりの時に童謡があった、として掲げられている三首のうちの第二首であり、誰のことをどのような立場で詠んだものか、ということが不明である。この歌の寓意について、研究者の見解が一致していないのも当然である。右の4〜6が本当の意味で類例なのかどうかということも、よくわからない。

### 3

このように、主語としての「臣の子の」を、第二句の「解く。」が述語として承ける、という解釈は成り立たない。また、連体修飾語としての「臣の子の」を、第二句の「解く。」が承ける、という解釈にも確かな根拠がない。だとすれば、ほかにどのような解釈がありうるか。

そのことを考える際に一つのヒントになるのは、次の『萬葉集』の歌である。

7 吾あがこころ恋流 千重ちへ乃一ひとへ隔母 慰なぐさもる 心もありやと 家のあたり 吾が立ち見れば…  
〔万四・五〇九〕

『日本書紀』の「臣の子の八重の紐解く…」という歌（佐佐木）

旅に出ている男が、家に残してきた妻への思いを詠んだ歌である。この歌では、「吾が」が主語であり、それを承ける述語が、連体形の「恋ふる」になっている。それだけでなく、連体形の「恋ふる」には、体言の「千重」を含む「千重の一重も」という表現が続いている。「私が恋うる（つらい気持ちの）千分の一でも、心を慰めることがあるだろう」という、期待を最小限におさえた表現が、「吾が恋ふる千重の一重も」の二句である。「千重の一重も」は、言うまでもなく「千重の（うちの、たった）一重でも」の意である。

こうした表現があることから、1の歌の場合も、「臣の子の」は主語、第二句の「解く」は連体形で、「八重の紐解く一重だに」は「八重の紐解く（うちの、たった）一重さえ」の意だ、と理解することができる。第一句～第三句が、主語を含む「臣の子が、八重の紐解く（うちの、たった）一重さえも」の意であれば、体言の資格をもつ「一重」という語が「解く」のあとにあることになるから、「解く。」というかたちで文が第二句で終止する場合のような、構文上の難点も無理もない。「臣の子の八重の紐解く一重だに」は、さきに引用・列挙した、『日本書紀』に見える二十数例の表現に、構文的に一致するものとなる。

言うまでもなく、7の歌の「恋ふる」という述語は、その主語である「吾が」に続いているが、1の歌では「解く」という述語は、目的語である「八重の紐」に続いている、という表現上の相違は、確かにある。しかし、1の歌の「八重の紐解く一重だに」もまた、7の歌の「吾が恋ふる千重の一重も」と同様に、最小限の事態について述べたものであり、両歌の表現のもつ意味的な類似は重視してよいだろう。

「臣の子の八重の紐解く一重」は、「主語＋主格助詞＋目的語＋述語（連体形）＋名詞」という複雑な構文・語結合になっている。しかし、この類例には、「安<sup>あ</sup>太<sup>だ</sup>人<sup>ひ</sup>乃<sup>の</sup>梁<sup>りやう</sup>打<sup>うち</sup>渡<sup>わた</sup>す<sup>す</sup>瀬<sup>せ</sup>を<sup>を</sup>速<sup>すみ</sup>み」（万十一・二六九九）、「吾<sup>が</sup>が<sup>が</sup>背<sup>せ</sup>子<sup>こ</sup>我<sup>が</sup>ふ<sup>ふ</sup>さ<sup>さ</sup>手



折りけるをみなへし」(同十七・三九四三) その他の例があり、決して例外的な表現ではなかった。

このように見てくると、1の歌の「臣の子の、八重の紐解く一重だに未だ解かねば」は、「臣の子が、八重の紐を解こうとするその一重さえもまだ解かないのに」の意となる。これであれば、現在の一般的な解釈がもつ、上代語の表現としての難点はすべて解消する。

さて、第一句～第四句はそれでよいとして、残る第五句の「御子の紐解く。」はどのような表現だと理解すべきか。「御子の」は、述語の「(紐)解く。」が承ける主語だ、と解することは無理である。その理由は、「臣の子の」という主語を「解く。」という述語が承ける、と解することが無理であるのと同じである。

「御子の紐解く」に対する妥当な理解は、これが強い詠嘆を表す連体形止めの表現でない限り、たった一つしかない。それは、「御子の」を連体修飾成分だと解し、「解く」を「解ける」という意味の下二段活用・自動詞の終止形だと解して、「御子の紐は(容易に/やすやすと)解ける」の意だと見る、ということである。四段活用の他動詞も、下二段活用の自動詞も、終止形は同じく「解く」である。

このように言うと、第二句・第四句に用いられた「解く」はともに他動詞であることが明瞭なのに、第五句の「解く」は自動詞だと考えるのは、便宜主義的であり場当たり的だと思うられるかも知れない。しかし、実は決してそうではない。

1の歌では「臣の子」と「御子」とが対比的に詠み込まれているということは、しばしば指摘される。「臣の子が、八重の紐を解こうとするその一重さえもまだ解かない」という事態との対比効果が顕著なのは、「御子が紐を解く」という事態よりも、「御子の紐は(容易に/やすやすと)解ける」という事態である。この点で、第五句の「解く」を自動詞だと解することには、十分に可能性がある。

同源の動詞ではあるが、語尾の異なる「寄る」と「寄す」、「明く」と「明かす」が一首のなかに共存した実例がある。

- 8 朝なぎに 来依白浪 見まく欲り 吾はずれども 風こそ不令依  
〔万七・一三九一〕
- 9 高浜に 支與須留波の 沖つ波 與須とも與良志 子らにし與良波  
〔常陸風土記〕
- 10 昼は 日の暮るるまで 夜は 夜の明流極み 思ひつつ 阿可思つらくも 長きこの夜を  
〔万四・四八五〕

また、同源の自動詞と他動詞が共存し、その一方が序・比喻を構成した例は、

- 11 押し照る 難波の崎の 並び浜 並べむとこそ その子はありけめ  
〔紀四八〕
- 12 網の浦の 海処女らが 焼塩の 思ひこそ所焼 吾が下心  
〔万一・五〕
- 13 谷せばみ 峯辺に延有 玉葛 令蔓之あらば 年に来ずとも  
〔万十二・三〇六七〕

などある。8の「並び」と「並べ」との相違はわかりやすい。9の「焼く」は四段活用 of 他動詞、下の「焼くる」は「焼ける」の意で、下二段活用 of 自動詞である。後者が自動詞であることは、「所焼」という表記によって明らかである。10の「延へる」は、原文を見れば明らかのように「延ひある」に由来するもので、「延ひ」は四段活用 of 自動詞である。下の「延へ」が下二段活用 of 他動詞であることは、「令蔓」という表記に示されている。

さらに、1の歌と同じく、「解く」の自動詞と他動詞が共存した実例もある。

14 いふかりし 国のまほらを つばらかに 示し賜へば 嬉しみと 紐の緒解而 家のごと 解而そ遊ぶ…

〔万九・一七五三〕

15 昼等家波 等家なへ紐の 我が背なに 相寄るとかも 夜解け易け

〔万十四・三四八三〕

『萬葉集』には、自動詞を用いた「紐解く」が六例あり、そのうち、

16 草枕 旅の紐解 家の妹し 吾を待ちかねて 嘆かすらしも

〔万十二・三二四七〕

という歌の「紐解く」は、1の歌の「紐解く」と同じく、「紐が（自然に）解ける」という意味の自動詞の実例である。

以上の諸点から、1の歌の「御子の紐解く」を「御子の紐が解ける」と解することは、十分に可能だと判断される。

#### 4

結局、1の歌の全体は、ことばを補って口訳すると、

臣の子が、八重の紐を解こうとするその一重さえもまだ解かないのに、御子の紐はもう解けてしまった。

『日本書紀』の「臣の子の八重の紐解く…」という歌（佐佐木）

というようなものになるだろう。既に確認したとおり、歌意をこのように理解することには、上代語の構文から見ても、上代の歌のありかたから見ても、難点といったものは何も含まれていない。

よく言われるように、天智天皇が崩御したあと、近江方の廷臣がすぐに事態を収拾する策を講じないでいるうちに、大海人皇子が迅速に行動して、結局は壬申の乱に勝利した、ということを予言的に諷刺した歌だ、と理解するのが妥当だろう。